

実践！遠隔合同授業～小規模校が抱える課題の解決に向けて～

岩見沢市立メープル小学校 学級数4 (校長 尾花 靖 宏)
 深川市立多度志小学校 学級数4 (校長 木村 一 典)

I 実践までの経緯

令和4年度全国学力・学習状況調査や標準学力検査の結果から、次の課題が明らかとなった。

岩見沢市立メープル小学校	多様な考えに触れ自分の思考の幅を広げることや、相手意識をもちながら表現すること
深川市立多度志小学校	考えや感想をもって伝え合うこと


こうした両校の課題解決に資する、遠隔合同授業の必要性について、岩見沢市立メープル小学校及び深川市立多度志小学校において共通認識を図り、実践に向けて、目的を次のとおり設定した。

- 遠隔合同授業において、児童が互いの意見を聞き、解釈や比較することなどを通して、自分の考えの幅を広げることのできる機会を設定し、対話的な学びの質の向上を図る。
- 対話や議論を通じて、集団として考えを発展させる協働的な活動を目指すなど、主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を行う。

II 実践の概要

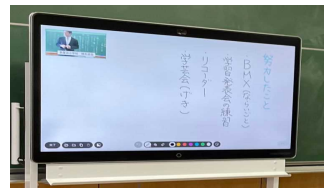
- 1 主 題 「困難を乗り越える」(第5学年 道徳科)
- 2 題材名 昭和の大横綱 大鵬幸喜(出典:北海道版道徳教材「きた ものがたり」)
- 3 本時の展開(一部のみ)

(1) 授業開始前及び導入の部分

事前 接続	13:10 接続開始(全5場面) メープル小 2画面(全体1、予備1) 多度志小 3画面(指導者1、児童2) 映像、音声について正常であるかを確認 確認後、授業開始時まで接続のままにしておく。	使用したWEB会議システム: Cisco Webex Meeting 実践前日に、両校の児童が一人ずつ自己紹介を行う場 を設定し、本時の授業で緊張せず交流が行えるよう工夫 した。
段階	●学習活動 ○主な発問(◎中心的な発問) ・児童の反応	指導上の留意点(■評価) (「M」はMT、「S」はSTを示す)
導入 (8)	● 自分が「努力した」経験について発表する。 ○ 自分がこれまでの生活の中で「努力した」という経験にはどのようなことがありますか。また、その時にどのようなことを考えて頑張りましたか。ワークシートに書きましょう。 ・学習発表会(学芸会)で劇の練習をしたときに、うまく身体で表現できなくて悩んだけど、最後まで自分の役割をしっかりと果たそうと思って頑張った。 ・習い事の発表会に向けて、自宅で練習もしたけど、お家の人に励ましの言葉をもらって、自分で「最後までやってみよう」と思った。 ○ 記入した内容を発表する。	M:ねらいとする道徳的価値の方法付けをする。 M/S:ワークシート(紙媒体)に記入させる。 メープル小 学校の様子  S:児童が発表した内容をキーワードでWebexのホワイトボード機能を活用して示していく。(ボード①)(画面共有)

両校の学級担任が、MT(主担当)・ST(副担当)となり、授業中における役割の明確化を図った。

両校の児童が互いの発表内容を見ることができるよう、ホワイトボード機能を活用した。



(2) 展開の部分

展開	○ 児童が書いたホワイトボードをメープル小の児童から順に全児童が発表していく。	M/S:児童へワークシートに記入するよう指示する。また、記入した内容を各自のホワイトボードに書き示すように指示する。
----	---	--

【児童の様子：深川市立多度志小学校】
自分が書いた内容が、相手校の児童に伝わるかを確認しながら、記述する様子が見られた。



【児童の様子：岩見沢市立メープル小学校】
どのように書いたら相手校の児童に伝わるのかを意識しながら記述する様子が見られた。



III 本実践の成果(○)と課題(●)

- 1 協働的な学びの充実について
 - 児童が相手校の児童に向けた発表をする際に、相手意識を大切にされた様子が見られるなど、対話的な学びの充実につながる可能性が見えてきた。
 - 両校の児童が混合したグループ編成を工夫するなど、話し合い活動の工夫により協働的な学びの充実を図る必要がある。
- 2 機器操作等の運営について
 - 児童が自分の経験について話す場面の機器操作方法等について、事前に交流したことで、本時で大きな混乱なく授業を行うことができた。
 - 今年度の実践を、次年度以降、教職員が変わっても継続していくことのできる学校体制づくりが必要である。

複式学級における地域内の学校との遠隔合同授業

泊村立泊小学校 学級数5 (校長 太田 雅 則)
神恵内村立神恵内小学校 学級数5 (校長 荒木 俊 行)

I 実践の趣旨

泊小学校と神恵内小学校では、令和3年度から、第3・4学年において、ICTを活用した遠隔授業と地域と連携した活動による交流に取り組んできた。

今年度は、全学年での遠隔授業を計画的に実施し、取組の充実と合同授業の検証改善を図った。

II 実践の概要

1 遠隔授業の実施に至る経緯

両校は、コロナ禍以前より合同形式の交流活動を行ってきた。コロナ禍においても交流活動を発展させ、両校の児童が様々な学習活動を通じた交流により、多様な見方や考え方に触れ、コミュニケーション能力を高める機会とすることができるようオンラインを活用した実践を中心に連携を深めることとした。



【第3学年国語科の授業様子（泊小）】

2 遠隔授業の利点を生かした授業実践

(1) 第3・4学年国語科の授業

第3学年国語科「二年生で学んだ漢字」、第4学年国語科「三年生で学んだ漢字」の学習では、当該学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使おうとする習慣を身に付けるようにすることをねらいとして、第3学年は神恵内小学校の教諭が、第4学年は泊小学校の教諭が授業を行った。他校の児童から刺激を受けて活発に発言する姿が見られ、自分の考えを広げることができた。

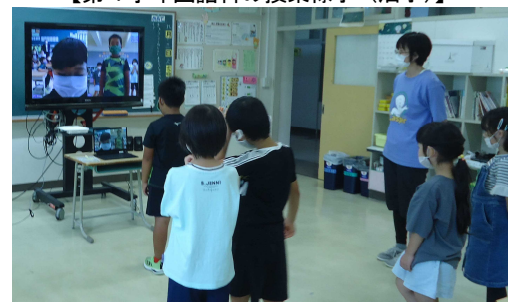
遠隔合同授業を行うに当たり、事前の打合せでは、単元や学習内容、課題の設定、事前に指導しておく事項、全体交流の進め方について検討したことなどにより、児童は、スムーズに国語科の授業に臨むことができた。



【第4学年国語科の授業様子（泊小）】

(2) 第1・2学年の取組

第1学年道徳科「みんながえがおに」では、児童は他校の児童や教員とのやり取りを楽しむとともに、多様な考え方に触れ、相手のことを考えた言葉を使うことの大切さについて実感しながら学習に取り組むことができた。第2学年国語科「漢字のつかい方と読み方」では、他校の児童と学んだ漢字を使ってクイズを出し合うことで、楽しみながら知識・技能を身に付ける児童の姿が見られた。



【第1・2学年特別活動の様子（神恵内小）】

III 実践の成果（○）と課題（●）

- 児童は、他校の児童と定期的に交流することで、新たな人間関係を構築することができた。
- 互いに伝え合うことを最終的な目的とした学習活動を設定することで、児童の学習に対する目的意識が高まり、児童の主体的な学びを生み出すことができた。
- 互いの児童の実態を事前に把握しておくことで、円滑な授業実践につながった。
- 事前の接続テストにより、両校の通信環境を統一しておくことで、児童のスムーズな交流につながった。
- 複式学級の特性を生かした効果的な遠隔合同授業の実施に向け、両校における教育課程や日課などを調整する必要がある。

小規模校における遠隔合同授業

伊達市立関内小学校 学級数4 (校長 萩原 享)

1 本実践の概要

本校では、小規模校の特性を生かし、一人一人に応じたきめ細かい指導を行っている一方、他者に対して自分の考えを伝えるコミュニケーション力を高めたり、集団の中で様々な価値観や考え方に触れる機会を設けたりする指導の充実に課題があることから、近隣の小規模校同士が連携した遠隔合同授業を推進している。

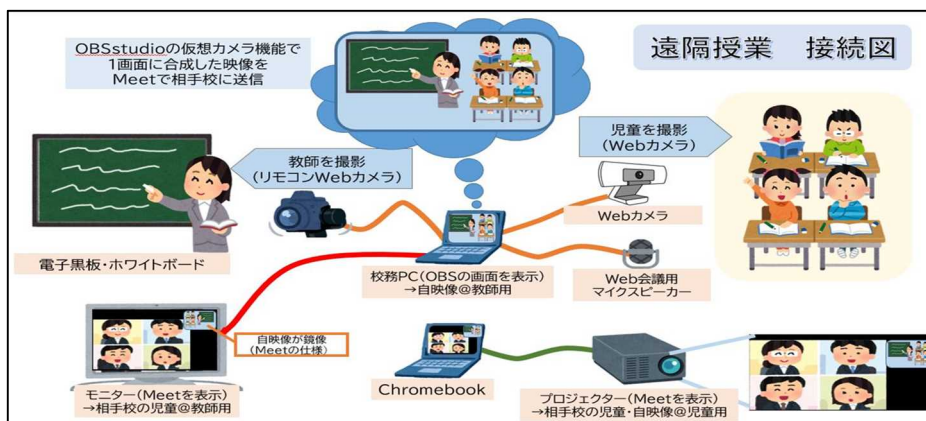
2 遠隔合同授業の目的

遠隔合同授業の目的を次の3点として、学校間で共通理解を図っている。

- (1) 児童同士の対話や議論を通じて協働的な学びを構築する。
- (2) 他校の児童に説明したり発表したりする活動を通して、相手意識を踏まえたコミュニケーション力の育成を図る。
- (3) 中学校区の小学校間における遠隔合同授業を通して、心豊かな人間性を育み、中学校進学に向けて円滑な接続を図る。

3 事前の準備・打合せ

遠隔合同授業の円滑な実施に向けて、年間指導計画への位置付けをはじめ、日課の調整及び授業進捗の統一、両校における打合せ時間の確保、Google Classroomの作成、接続テスト日時の調整などの準備や打合せを行っている。



【遠隔合同授業の接続イメージ】

4 実施学年と接続校/教科

令和4年度は9月時点で、次の合同遠隔授業を実施した。

対象学年	接続校	教科 (実施回数)
第1、2学年 男子4名、女子2名	伊達市立大滝徳舜暫学校第1、2学年 男子2名	特別活動 (1)
第2学年 男子1名、女子1名	伊達市立大滝徳舜暫学校第2学年 女子4名	特別の教科 道徳 (3)

5 成果(○)と課題(●)

- ICT教室を常設したことにより、機器の設置や準備にかかる時間と人員を最小限にして授業を実施することができた。
- 他校の児童とつながることにより、様々な価値観や考えに触れ、回数を重ねるごとにコミュニケーション力の向上や考えの深まりが見られた。
- 児童がGoogle jamboardの付箋機能を活用することで、考えや意見の共有ができ、協働的な学びの充実につながった。



【遠隔合同授業の様子】

- 日課表や授業時間について、両校で綿密に確認するとともに、端末の活用方法等、授業実施に向けた事前の打合せ時間を十分確保する必要がある。
- 今後も遠隔合同授業を継続して実施し、中学校進学に向けた円滑な接続を図るため、実施方法や他教科における遠隔合同授業の在り方等について検討する必要がある。

複式学級における近隣小規模校との遠隔合同授業

白老町立虎杖小学校 学級数5 (校長 関東 英政)

I 実践テーマの趣旨

本校では、在籍児童数が少ないことから学習集団が固定し、多面的・多角的な考えに触れる機会も少なく、学びを広げることが難しい状況である。そのため、町内の同規模校である白老町立竹浦小学校と遠隔合同授業を実施し、同学年の異なる集団同士が1つの授業に参加させることで、多面的・多角的な思考が広がり、学びの質を高められると考え、遠隔合同授業の取組を推進している。

II 実践の概要

1 先行実践校から学ぶ

本校では、令和3年度から ICT 機器を活用した学習についての校内研究を開始した。その中で、先行実践校の取組を参考にして遠隔合同授業における指導体制を整えた。

研究当初は、1人の授業者が複数校の授業を担当する体制を考えていたが、各教室に授業者を配置する遠隔合同授業の実施に向けて、研究を進めるとともに、北海道立教育研究所プロジェクト研究に参加し、管内で当該プロジェクト協力校の伊達市立関内小学校の遠隔合同授業の実践を見学し、参考にすべき授業技術等を教員間で共有した。

2 遠隔合同授業の体制確立

(1) 令和3年度の実践

白老町立竹浦小学校との遠隔合同授業の実施に向け、初めに、休み時間の交流を始めた。その後、第5・6学年の図画工作科及び第1・2学年の道徳科において、多様な考えに触れることをねらいとして遠隔合同授業を実施した。

遠隔合同授業の実施にあたり、機器の接続や授業準備の多さなどの課題を2校で共有し、短時間で負担感なく準備できる環境を整備する必要があることを確認した。

(2) 令和4年度の実践

新年度、原則として週1回、道徳科の授業を遠隔合同授業で行うことと、授業実施前に、Google meet を活用して授業者が打合せを行い、発問等の役割分担や進行方法を確認した。

授業においては、一人一台端末を活用し、児童が Google meet で画面に向かって発言したり、チャット機能を使って意見や発言者に反応したりした。

授業後は、2校の授業者が振り返りを行い、児童の活動、接続状況、進行方法等について意見交流を行った。児童は、多くの考えに触れることで新しい発見があったり、自分の考えに自信をもつ姿が見られたりするなど、遠隔合同授業の意義を感じる場面が見られた。

また、実践を重ねる中で授業者の役割を入れ替えたり、他学年での実践の広がりが見られたり、準備時間の効率化が進んだりするなど、短時間で負担感なく準備できる環境が整備できたことから、国語科でも実施することができた。



【遠隔合同授業の様子】

III 成果 (○) と課題 (●)

- 道徳科を中心に、これまでの実践により蓄積したノウハウを生かし、国語科で実施できたことから、次年度以降、他教科等においても遠隔合同学習をしたいという声が出るなど、取組の成果が表れている。
- 効果的な遠隔合同授業の実施に向け、ICT活用の在り方を含めた教育課程の改善を図る必要がある。

複式学級における地域内の学校との遠隔合同授業 ～ICT機器を活用したオンライン授業の実践～ えりも町立えりも岬小学校 学級数5 (校長 高橋 郁子)

I はじめに

本町は、小規模の小学校が多く、他者と交流する機会が少ないことから、コミュニケーション能力の向上が課題となっている。昨年度まで、中学校への円滑な接続を目的として、町内の全小学校合同で第5学年の宿泊学習や第6学年の修学旅行を実施してきた。昨年度から、ICT機器を活用したオンラインによる遠隔合同授業を町内の小学校と実施し、集団の中で伝え合う力の一層の向上に取り組んでいる。

II 実践の概要

1 第6学年の実践

(1) 国語科「物語を作ろう」

町内の小学校2校で、児童が書いた物語を事前に交換し、読み合う時間を設定した。他校の児童が、物語を正しく読み取ることができるよう、相手意識をもたせたことで、普段以上に文章構成を練ったり、丁寧に書いたりすることができた。遠隔合同授業当日は、Google classroomを活用し、授業の冒頭で、アイスブレイクを行い、交流しやすい雰囲気を醸成した。その後、5つのグループを作り、作成した物語の感想を互いに伝え合い、交流することができた。



【児童同士で相談する様子】

(2) 国語科「自分の考えを発信しよう」

町内の小学校3校が、町内の全小学校合同で実施した修学旅行のまとめのポスターを紹介し、感想を伝え合う時間を設定した。国語科の「物語を作ろう」の学習を生かし、他校の児童に分かりやすく伝えることができるよう、相手意識をもたせ、ポスターを制作することができた。遠隔合同授業当日は、アイスブレイクに学習ゲームを取り入れ、説明の仕方を分かりやすく工夫する活動を行った。交流の場面では、同じ学校の児童同士で相談しながら交流することができた。



【体を動かしている様子】

2 第5・6学年の実践

町内の小学校2校で、体育科「体づくり運動」において、自分たちが考えた運動メニューを互いに紹介し、実践する学習を行った。児童は、グループで考えた手軽な運動メニューを基に、体を動かす楽しさや心地よさを味わうとともに、その行い方を理解することができるよう、説明の仕方を工夫していた。遠隔合同授業では、説明している本人には分かる内容が、相手には伝わらない場合があることを知るとともに、正しく伝えるため、どのようなことを工夫すればよいか考えて交流することができた。



【遠隔合同授業で交流する様子】

3 今後の展望

中学年で、体育科「体づくり運動」の遠隔合同授業の学習を予定している。第5・6学年の実践を基に、グループで考えた運動メニューを交流するだけでなく、適切なコミュニケーションのとり方を考える機会とするなど、伝え合う力の向上を図る取組としたい。

III 成果(○)と課題(●)

- 日常の学校生活と異なる集団で交流することにより、児童が相手意識をもち、書き方や話し方などを工夫するなど、コミュニケーション能力の向上につながった。
- 遠隔合同授業を通して、近隣の小学校の児童と交流することで、「伝え合う力を高める体験」の機会が増えたことから、中1ギャップ問題の未然防止が期待できる。
- 遠隔合同授業を実施する中で、音声や映像が止まったりすることもあることから、想定されるトラブルに対し、事前に準備することや、対処方法について十分に確認し合うなど、連携を密にして授業準備を行う必要がある。
- 効果的な遠隔合同授業の実施に向けて、日程に余裕のある指導計画の立案、調整方法を検討するとともに、授業のねらいに応じたグループ編制など授業の在り方について工夫を図る必要がある。

伝え合うことの楽しさが実感できる遠隔合同授業

音威子府村立音威子府小学校 学級数 4 (校長 岩谷 孝二)

I はじめに

本校は、小学校12名、中学校13名の小中併置の極小規模校である。本実践の対象学年（第5学年）に在籍する児童数は1名であり、村内には他に小学校がないため、同学年の児童と交流する経験がない環境である。そのため、近隣町と連携し、同学年児童との交流を通して、協働的に学ぶことの楽しさを体験させたいと考え、ICT端末を活用して町村の域を越えた遠隔合同授業を行った。

II 実践の概要

(1) 中川町立中央小学校との遠隔合同授業

令和3年度から、上川管内ICT活用促進事業～プロジェクトIPPO～の中で、中川町立中央小学校とつながりをもつことができ、遠隔合同授業を実現させることができた。遠隔合同授業の実施に向けて、両校の打合せを電話、コミュニケーションツールアプリ等で行い、遠隔合同授業により期待する効果を次の2点とした。

- 異なる価値観との出会いの場を生み出し、思考の広がりを実現すること
- 自分の考えに対して、意見を述べてくれる相手が複数いることで、自分の考えが揺さぶられたり、未完成な考えに出会い、児童同士が補い合ったりしながら解決できること

以上の期待する効果を実現させるために、国語科「自分の経験と結びつけて考えよう」の単元を合同で学習することとした。

指導計画は全14時間とし、第1次、第2次の計7時間は各学校で行い、第3次7時間中の5時間は、オンラインで行う計画を立てた。

(2) 美深町立美深小学校との修学旅行合同報告会

美深町立美深小学校と修学旅行に向けた事前学習を遠隔合同授業で行い、各学校の修学旅行後に、「修学旅行先で学んできたことを相手の学校に伝えよう。」という学習課題を設定し、報告会を行った。

Web会議システムを活用した遠隔合同の報告会では、本校児童は美深町立美深小学校の児童に対して、端末のプレゼンテーションソフトを用いて、自信をもって説明することができた。

また、美深町立美深小学校の発表の様子に刺激を受け、教師に促されなくても、積極的にカメラの前に行き、質問や感想を述べるなど姿が見られるなど、伝え合うことの楽しさを感じていた。

IV 成果と課題

- 一度の交流ではなく、全体オンライン、グループオンライン、各学校での個人学習を効果的に組み合わせた単元を通して学習することで、児童は、多様な考えがあることを知り、協力して学習する楽しさを体験することができた。
- 小規模校の児童にとって遠隔合同授業は、同学年の意見や考えを知り、自分の考えと比較し、考えを広げる機会になるなど、学習の効果を高めることができることを実感できた。
- 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、遠隔合同授業を他学年の学習においても効果的に活用できるよう、指導計画を改善する必要がある。

中川町立中央小学校との遠隔合同学習の流れ

- ① 発表方法（伝え合う内容の検討）
：遠隔合同授業（全体）
- ② 役割分担（話の構成を考える）
：遠隔合同授業（グループ）
- ③ 調べる（表現を工夫する）
：各学校（個人）
- ④ 比較する（考えを比較する）
：遠隔合同授業（全体・グループ）
- ⑤ プレゼンテーション（考えをまとめる）
：遠隔合同授業（全体・グループ）
- ⑥ 振り返り（考えを広げる）
：各学校（個人）

美深町立美深小学校との遠隔合同学習の流れ

- ① 修学旅行事前学習（計画）
：遠隔合同授業（全体）
- ② 調べる（考える）
：各学校（個人）
- ③ 修学旅行（実践）
：各学校で別々の旅程で実施
- ④ 修学旅行事後学習（振り返り）
：各学校（個人）
- ⑤ 修学旅行報告会（まとめ）
：遠隔合同授業（全体・グループ）

切磋琢磨できる学習環境の構築に向けたICT機器活用による遠隔合同学習の推進 東神楽町立志比内小学校 学級数4 (校長 木末 携志)

1 はじめに

本校は、東神楽町の市街地から約15km離れた志比内地区にあり、開校113年の歴史をもつ、地域に根付いた学校である。全教職員の協働体制の下、自然に親しみ地域の人から学ぶ体験的な教育活動を推進している。平成5年度に山村留学校・特認校の指定を受け、今年度の全校児童は7名で、全員が山村留学児童であり、同学年と学ぶ機会が少ないことや中学校進学への不安などもあることから、これらの課題の解決に向けた取組の一つとして、令和3年度から遠隔合同学習をスタートした。

2 町内小・中学校が一環となった取組の推進

(1) 小中一貫教育の推進

東神楽町では、義務教育9年間を通して、学校・家庭・地域が共に子どもたちを育てていくことを目的として小中一貫教育を推進している。小・中学校が9年間を通して目指す子ども像を共有し、9年間の系統性を確保した教育課程を編成し、学習指導を行うとともに、各校で共通した生徒指導や小・中学校で一貫した特別支援教育を行うことができる仕組みを整備している。

(2) 中学校専科教員による授業

町内小学校3校の高学年の算数科と第4～6学年の外国語活動・外国語科において、中学校の専科教員による専門性を生かした授業を行っている。そのうち、それぞれ1時間を東神楽小学校との遠隔合同授業としており、遠隔合同授業は、大人数での活動の経験が少ない本校児童にとって貴重な学習の機会となっている。

1人1台端末を活用した遠隔合同授業の実施は、同学年の児童とともに切磋琢磨できる機会となり、児童の学習意欲の向上につながっている。

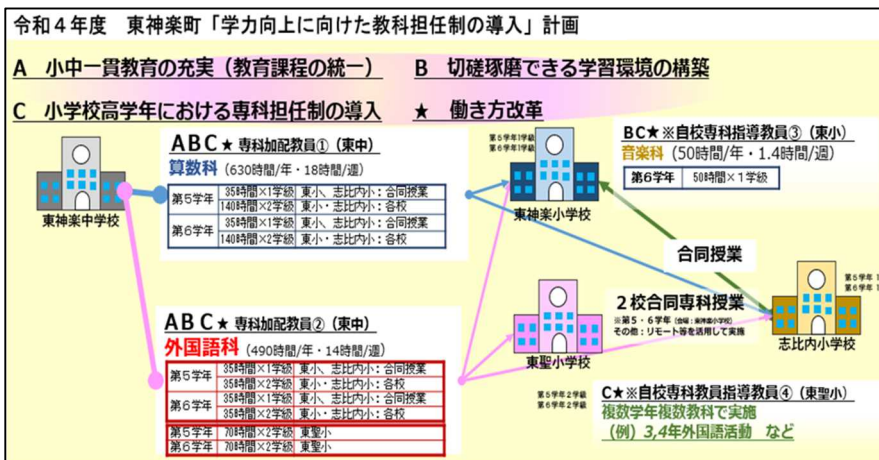
(3) 中学校への円滑な接続に向けた取組

今年度から、小学校間の連携を一層推進するため実施された町内

3小学校合同宿泊研修では、他校の児童と積極的に交流しながら活動をするなど、本校児童の課題について改善が見られた。

今後も遠隔合同学習を継続し、他校の児童との交流を深め、中学校進学への不安感の軽減や中1ギャップの解消につなげていきたい。

さらに、中学校専科教員の授業だけでなく、合同宿泊研修における事前学習での活用や防災教育での探究的な学習への活用等、教科等横断的な視点で遠隔合同学習の活用を拡大するなど、新たな課題に真摯に向き合いながら、本校児童の学力向上や課題克服のために実践を積み重ねていきたい。



3 成果 (○) と課題 (●)

- 遠隔合同学習による同学年と学ぶ機会を設けたことにより、児童の学習意欲が向上した。
- 継続的な遠隔合同学習の実施により、合同宿泊学習において他校の児童とコミュニケーションを図ることができ、中学校進学に向けた不安感の軽減につながった。
- 画面上での表情や反応の読み取りづらさなど、オンライン特有の課題があるため、実施形態や実施内容などについて改善する必要がある。

遠隔合同授業による『協働的な学び』の実現

天塩町立啓徳小学校 学級数6 (校長 佐藤 美智子)
小平町立鬼鹿小学校 学級数4 (校長 建山 和則)

I 実践の趣旨

本校（天塩町立啓徳小学校）では、同学年同士による協働的な学びの充実に向けて、同じ管内の同規模校である小平町立鬼鹿小学校第4学年（6名）とICTを活用した遠隔授業を行った。

II 実践の内容

1 遠隔合同授業のねらいについて

- 児童同士が、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面の充実を図れるよう、「考えの形成、記述」の場面と「推敲」後の場面で遠隔合同授業を行うこととした。

2 事前準備について

(1) 事前確認の内容

取組が進められるよう次の点について事前に確認を行った。特に、教員の役割を明確にすることで当日の授業進行や児童把握につなげることができた。

- ・教材、時間割について
- ・使用機材、アプリについて
- ・T1・T2の役割について
- ・言語活動の内容について

(2) 事前打合せの方法

事前打合せについては、短時間で行えるようメールを中心に行ったことにより、授業者同士の負担感を減らすことができた。

3 遠隔合同授業の実施

(1) 第1回（5/7時間目）

- ・課題の確認
- ・意見文の交流

(2) 第2回（7/7時間目）

- ・完成した意見文の交流等

4 児童の感想

- ・はじめは緊張したけれど、同じ学年の他の学級の人の意見を聞くことや楽しく考えることができた。
- ・他の人がどのように書いているかを確認できたことで、自分の文章の役に立てることができた。
- ・オンラインで交流するために、相手に普段よりもはっきり話し、丁寧に書けるよう頑張っており取り組むことができた。

III 成果（○）と課題（●）

- ICTを活用し遠隔合同授業を行ったことにより、他校同学年の児童同士が意見を交流する中で、見方や考え方を深めることができるなど、児童は協働的な学びのよさについて実感することができた。
- 授業者同士で遠隔合同授業のねらいを明確にして実施したことにより、遠隔授業が「交流」に留まることなく、児童個々の学びの深まりにつなげることができた。
- 児童は、学習に対して意欲的に取り組み、学びの深まりを感じることができたことから、今後も計画的、継続的に遠隔合同授業を行うことができるよう、他校との連携を深める必要がある。
- これまで、対面での発表や交流の場面が主であったことから、今後は、オンラインなど様々な状況を設定し、児童が状況に合わせて発表や交流の仕方を自ら考えられるよう指導する必要がある。

単元名	内容のまとめ			
自分の経験と結び付けて考えよう (第4学年)B書くこと 教育出版版4年下「便利」ということ	第4学年 【知識及び技能】(2)情報の扱いに関する事項 【思考力、判断力、表現力等】「B書くこと」			
I 単元の見直し				
1 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。(知識及び技能)(2)イ				
2 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。(思考力、判断力、表現力等)B(1)ウ				
3 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)				
II 単元で取り上げる言語活動				
「便利」について自分の経験と結び付けて、自分の考えを投書する活動 (関連:「思考力、判断力、表現力等」B(2)ア)				
III 単元の評価規準				
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度		
比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使っている。(2)イ	「書くこと」において、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫している。(Bウ)	進んで、自分の考えと、それを支える理由や事例との関係を明確にし、学習の見通しをもって、「便利」について考えたことを文章にまとめようとしている。		
IV 単元計画(全7時間)				
時	学習活動	評価規準	遠隔授業	
1	「便利」とはどのようなことか考えながら本文を読み、自分の経験と照らし合わせながら考えをまとめる。		/	
2	自分の経験と筆者の考えをわかりやすく書き表す方法について知る。			
3・4	「便利」について投書を書く。			
5	書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける。			○自己紹介 ○自分の考えと支える理由について発表する。 ○互いの文章のよさについて考える。
6	理由や事実が分かり安くかけている目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整える。	知識・技能 (2)イ 思考・判断・表現 (Bウ)		
7	文章を交流し合う。	主体的に取り組む態度		○推敲した文章を読み合い、自分の文章の特徴について交流する。



【遠隔合同授業の様子】

遠隔合同授業を通じた小規模校複式学級における学習指導の充実を目指して

別海町立上風連小学校 学級数 5 (校長 伊藤 秀 則)
別海町立西春別小学校 学級数 5 (校長 太 田 等)

I 本実践の概要

GIGAスクール構想の実現に向けた環境整備については、本町では、令和3年度当初に児童生徒1人1台端末の整備が完了した。広大な面積に小規模校が点在する別海町においては、1人1台端末の効果的な活用が、学習指導のより一層の充実につながるものと考えている。

令和4年度は、別海町の教育施策として実施している「生きる力アッププロジェクト事業」の一環として、その構成員4名で組織する1つのグループが、授業者が相互に乗り入れをする複式学級における「遠隔合同授業」に取り組んだ。

II 本実践の内容

1 遠隔合同授業のねらいと構成

本実践のねらいは、「遠隔合同授業」を通じた小規模校複式学級における学習指導の充実である。1つの教室の中に2つの遠隔合同授業を構成し、西春別小学校の教諭が両校の第5学年を、上風連小学校の教諭が両校の第6学年を担当し、実践した。

	実施日	校時	内容(⑤:第5学年、⑥:第6学年)
1	10月14日(金)	5	⑤異分母分数の計算の仕方 ⑥比例の関係を調べる
2	10月17日(月)	5	⑤大きさの等しい分数の作り方 ⑥比例の性質の理解
3	10月19日(水)	5	⑤通分の意味の理解 ⑥比例の性質のまとめ
4	10月25日(火)	5	⑤通分の仕方 ⑥比例の関係を式に表す

【遠隔合同授業の実施計画】

2 授業について

(1) 単元の設定

算数科の第5学年「分数のたし算とひき算を広げよう」、第6学年「比例の関係をくわしく調べよう」について、それぞれ4時間の中単元を設定し、遠隔合同授業として実施した。

(2) 対象児童

- ・第5学年(上風連小学校6名、西春別小学校3名)
- ・第6学年(上風連小学校5名、西春別小学校4名)

(3) 使用機材・授業形態

児童は1人1台端末とイヤホンを使用し、画面上で全員の表情が確認できるようにした。授業者は指導者用端末のカメラで映るようにするとともに、そのカメラで板書を映したり、画面共有で教材を提示したりするなどして授業を展開した。また、学級担任が児童の学習の様子を観察しながら授業を行うことができるよう、通常の複式の授業同様、両校とも1つの教室に第5・6学年が同席する形態で授業を進めた。

(4) 授業の実際

遠隔合同授業を行うことで、児童が学び合うようになり、単元の3・4時間目には合同で展開される授業にも慣れ、他校の児童とも円滑にコミュニケーションを図りながら学習を進めることができた。また、当日には、登校できない児童が1人1台端末を活用し自宅から参加することができるようにしており、通常の授業と同じ条件で授業に参加することができた。



【授業風景(西春別小学校)】



【授業風景(上風連小学校)】

III 本実践の成果と課題(成果:○、課題:●)

- 共に学ぶ児童数が増えたことにより、児童は多様な考え方に触れ、学びの深まりを実感することができた。
- 各学校の教員が学年別指導を行うことにより、担当した学年の目標を明確にした指導の充実を図ることができ、小規模校の複式学級における、教科担任制の可能性を見いだすことができた。
- 今後は、複数の単元で実施するなど、学習のねらいに応じて、効果的な遠隔合同授業を実施することができるよう、指導計画の見直し・改善を図る必要がある。